

キリスト教教育と私 (11)

塩野和夫

(1)

1975（昭和50）年4月に同志社大学神学部3年生へ編入学した¹⁾。朝食と昼の弁当を作り、食事を済ませて朝8時過ぎには下宿を出なければならぬ。そのために時間を取ることができず、日課にしていた河原における祈りはしばらく中止した。代わりに朝6時から30分間を祈りの時とする。

オリエンテーションで戸惑ったのは、神学部の履修要領に経済学部との違いがあった点である。経済学部での取得単位が認められた教養科目では、外国語科目で必修だったドイツ語の1科目4単位と自然分野の1科目4単位を求められた。そこで75年度はドイツ語Ⅱ4単位を登録する。専門科目は履修を終えていた神学概論を除いてすべて自由選択だった。驚いたことに聖書神学・キリスト教史・組織神学の各分野ではほぼ教師数の演習が開講されている。しかも何科目でも演習を登録できた。ただし、卒業論文を執筆する必要はなかった。

先生方は学生に対して極めて友好的だった。それぞれの仕方でも神学研究あるいは学生生活に意欲的に取り組むよう指導されていた。たとえば、聖書学の先生である。3つの分野で75年度に最も多く履修したのは聖書学で、5人の先生から講義を4科目、演習を2科目学ぶ。詩篇を担当された山崎亨先生は毎回びっしり書かれた1枚のレ

1) 「読書ノート2」によると、1975年度に読んだ文献は以下の通りである。

キリスト教関係 『福音と世界4月号』（特集差別とは何か）パークレー 『明日への祈り』 J.H. コーン 『解放の神学』 ミシュル 『神に聴くすべを知っているなら』 『基督教研究』 第39巻第1号、椎名麟三 『私の聖書物語』 J.A.T. ロビンソン 『からだの神学』 U. デュルタイ 『シュライエルマッハーの生涯』 ガルダロスキー 『死に果てぬ神』

人文学関係 山本有三 『無事の人』 遠藤周作 『影法師』 ユゴー 『レミゼラブル(1)』 フランクル 『夜と霧』 ドストエフスキー 『死の家の記録』 Y. シュピリ 『アルプスの山の少女』 長谷川千秋 『ベートーベン』 松本愛子 『死の影の谷間で』 T. Storm, *Immenssee*. 山村政明 『いのち燃え尽きるとも』 島田好美 『石ころの歌』



• Z - Œ \ » # w è [ç à S £

ジュメを準備した上に、黒板にも板書される。講義する時は学生に向き直って、一人ひとりの心に届くように話された。大学から烏丸通りを少し北に行った所にある自宅にも招いて下さった。紀元前8世紀の記述預言者アモスとホセアを扱われた和田幹男先生は研究状況を細かく説明した上で、自らの見解を述べられた。今出川通りを東に行った中華料理店の2階でご馳走になる。同じ中華料理屋に招いて下さったのが、知恵文学を講じられた平野節夫先生である。平野先生は新進の研究者で、毎回の授業準備に追われている様子があった。演習科目では野本真也先生のヘブル語文法をとる。新約聖書神学では講義科目で橋本滋夫先生の新約聖書とその時代、演習科目で遠藤彰先生のギリシャ語を学ぶ。遠藤先生は左近義慈『新約聖書 ギリシャ語入門』をテキストにして坦々と教えられた。橋本先生は毎回多くの関連文献を脇に抱えて持参され、新約聖書研究の現状と可能性、そして魅力を語られた。組織神学は3人の先生から講

義を2科目、演習を1科目学ぶ。ティリッヒを講義された土居真俊先生を「千利休が神学を論じているようだ」と評する学生がいた。「的を射ている！」と思った。一言ひと言の含蓄が深かった。眼光の鋭い石井裕二先生からはバルトを教えていただく。石井先生は毎回「なるほど」と納得させられる視座からビシビシと分析の手を加えられた。洛南教会で面識を得ていた緒方純雄先生からは講義でシュライエルマッハーを、演習で教会論をとる。先生は毎回外国語文献のコピーを持参され、翻訳しながらコメントを加えられた。英書講読は深田未来生先生に学んだ。キリスト教史とキリスト教文化史はとらなかつた。

授業が始まって10日ほど経った頃である。保健室から呼び出しを受けた。指定された時間に学生会館の地階にあった保健室へ行くと、待合室には数名の学生がいた。順番が来て名前を呼ばれたので医務室に入り、机の前に座る。正面には若い医師、左斜め前に年輩の女性看護師がおられた。医師が話し出される。

医師 今日来てもらったのは、先日の検尿検査の結果をお知らせするためです。

塩野 はい。

医師 塩野さんはこれまでに尿検査で何か問題を指摘されたことはなかったですか。

塩野 ありません。

医師 今回の検査で蛋白が認められています。心配する値ではないのですが、定期的に検査しておく必要はあります。

塩野 分かりました。

医師 それでは次回は1か月後に来てください。

その時は腎臓に問題が起こり始めているとは知る由もなかった。

*

東九条での生活を始めて間もなく、祈りのうちにある問題と直面していた。それは4月から神学作業を始めるにあたって繰り返された「課題をかかえた地域で取りくむ神学は神の支えなくしてできるものではない」という認識である。そのためにどうしても神の支えが必要であり、神に養われる場を持たない神学作業は考えられなかった。このような問題は本来、所属教会の牧師に相談すればよい。しかし、これまでのいきさつもあり香里教会の牧師には相談できなかつた。

神学部の編入学試験に合格し、4月からの新たな学生生活を思い描けるようになる。そこで3月12日(水)に、神学研究上の悩みを同志社教会牧師 寺崎暹先生に聞いていただいた。寺崎先生に相談したことで、事態は思いもよらない方向へと進展する。先生のアドバイスは次の3点であった。

- 1 同志社大学での礼拝開催に関してはできる限りの協力をする。
- 2 このことを春に行われる同志社教会青年会の修養会で訴え、協力者を求めるとよい。
- 3 神学部教授の山崎亨先生はこの計画に賛同くださると思う。早急に山崎先生に相談するとよい。

翌3月13日(木)に山崎亨先生を神学館の研究室に訪ねた。寺崎暹先生の「ぜひ、山崎先生を訪ねるように」というアドバイスを紹介し、同志社大学で礼拝を希望する趣旨を述べた。山崎先生からも積極的なアドバイスを3点いただいた。

- 1 同志社大学で礼拝を行うのであれば、ぜひ参加したい。
- 2 礼拝で説教の担当を求められれば、引き受ける。
- 3 礼拝の会場としては神学館3階の礼拝堂を使用すると良い。このことについては私から事務室に「使用を許可するように」と言っておく。

3月15日(土)には神学館で偶然出会った世光教会の荒木崇さんに話を聞いてもらう。荒木さんからは「趣旨を明確にする必要がある」と指摘された。そこで、3月16日(日)夜に「礼拝-その意図」を書き、緒方純雄先生・深田未来生先生・遠藤彰先生・藤代泰三先生に送った。次の通りである。

礼拝-その意図

まず、個人的に神学という作業の中に神に祈りその御言に耳を傾ける時・場の必要を感じる。同志社大学で同じニーズを感じ、礼拝を持とうという者が5名集まれば、共に祈り神に礼拝を捧げる場を同志社大学で持ちたい。

このことは同志社大学で大きな意味がある。同志社は新島襄先生の祈りによって

始められた。以来、キリスト教を徳育の基本としてきた。同志社がそのような看板を出す以上、看板に責任がある。責任を負えないなら、看板は外さなければならぬ。一つのそして最も重要な看板の内容として礼拝がある。

人の思いを離れて言うならば、神が同志社大学での礼拝を欲しておられると信じる。

4名の先生全員から、「礼拝を行うのであれば、説教の担当を引き受ける」という返事をいただいた。

*

先生方から説教担当に対する前向きな意思を確認できたので、4月に入って礼拝開催への協力を申し出ていた学生で集まった。次の5名である。

山見正徳 (神学部院生)

越川 (神学部学生・男)

渡辺馨子 (同志社教会)

沢村礼子 (神学部学生)

塩野和夫 (神学部学生)

集まりでは「1 目的と目標 2 主催者と参加者の呼びかけ 3 神学部教授会への対応 4 神学部自治会への対応」について意見交換した。その上で、会の名称を「イエスの言を聞く集まり」に決定する。スケジュールとしては、4月17日(木)昼休みに神学館礼拝堂で1回目を実施し、準備祈禱会を前日の昼休みに宗教センター会議室で開くことにした。その上で、各自が担当して具体的な準備に入る。4月16日(水)昼休みの準備会では祈りを捧げた後に、礼拝プログラムと担当を確認した。準備したチラシの配布についても、手分けして礼拝当日に何か所かで手渡した。

4月17日(木)昼休みに開催した第1回「イエスの言を聞く集まり」²⁾のプログラムとその日の祈りは下記の通りである。

イエスの言を聞く集まり

イエスは答えていわれた。

「又はパンだけで生きるものではなく 神の口から出る一つ一つの言で生きるものである」と書いてある。」

神の口から出る一つ一つの言とは 十字架につけられた死の刑罰を見あげての言ではなく、十字架の上から血を流して下さるから、死に与るために祈る死の刑罰 十字架にイエスの言です。

多くの人がこの十字架に愛ということを知られ その言に生きる勇気を与えられました。

下記の通りそのイエスの言を聞く集まりが計画されています。多くの方が参加されるようお願いいたします。

イエスはこれを聞いていわれた。

「実なる人に医者はいらぬ。いづのは病人である。

「あはしかばねのほ、あわれみであって、いけにえではない」とはどのような意味が導きださぬか。

あはしかばねのほ、義人を招くためではなく、罪人を招くためである。」

※集會予定

日 日	時 間	場 所	先 生	
4月17日	12:15~45	神学館礼拝堂	寺崎 暹	同志社教会牧師
4月24日	12:15~45	神学館礼拝堂	山崎 亨	神学部教授
5月1日	12:15~45	神学館礼拝堂	藤代 恭三	神学部教授
5月8日	12:15~45	神学館礼拝堂	深田 幸生	神学部教授
5月15日	12:15~45	神学館礼拝堂	緒方 純雄	神学部教授
5月22日	12:15~45	神学館礼拝堂	遠藤 彰	神学部教授

® □μwt) XB†“-

2) 「イエスの言を聞く集まり」については、下記を参照。塩野和夫「同志社神学部で礼拝を」(『基督教世界』第3328号, 1977年9月10日, 4頁)

黙祷

讃美歌 257番

聖書 マルコによる福音書第10章32-34節

祈り

説教 「開拓者の精神」

同志社教会 寺崎 暹 牧師

讃美歌 261番

祈り

父なる神さま、

今、私たちはあなたの御言を聞こうとしてこの場に集っています。

ここに生活に疲れた者があれば、あなたの御言で癒しを与えてください。

ここに悩みに苦しむ者があれば、あなたの御言で悩みに立ち向かう勇気を与えてください。

ここに人と憎しみ合っている者があれば、あなたの御言で和解を与えてください。

どうか今、この場であなたの御名と日本のために立てられた同志社を導くあなたの御言を与えてください。

主イエスの御名によって祈ります アーメン

(2)

神学部で編入学して大きく変化した一つに友人関係がある。島一郎ゼミの同期生や聖書研究会の仲間だった同級生のいないキャンパスに、何かが欠けている違和感を覚えた。その一方で新たな出会いもあった。

香里教会のよるだん会メンバーを初めとして、東九条の下宿を訪ねてくれる友人が毎週のようにあった。そこで役に立ったのは、母親が準備してくれた食器である。彼らと食事を共にしながら時を忘れて話し合った。よるだん会ですでに仕事をしている人たちの職場体験は興味深かった。

山見正徳氏と最初に出会ったのは入学前の3月、洛南教会においてである。緒方純雄先生を訪ねて来た山見さんを先生が紹介下さった。2人はたちまちに意気投合する。5月になって阪急京都線の鉄橋が桂川に架かる辺りにあった彼の下宿を訪ねた。驚いたことに山見さんは網を作っている。「この前の雨の日に橋脚の所にたくさんの鮒が

集まっているのを見て、何とかならないかと思ってね……」と話す彼に、感性と行動パターンの違いを感じた。山見さんに紹介された渡辺孝治氏も独自の世界を持った人だった。渡辺さんは野本真也先生のもとで「主の僕の歌（イザヤ書53章）」を研究していた。ドイツ語文献に疲れると、彼は「リフレッシュするために禅寺へ行く」と話していた。いずれも個性豊かな人たちだった。

東九条での生活を始めてから日曜日の夜は洛南教会へ行き、小原安喜子先生の指導による讃美歌練習に参加した。集まってきたのは男子青年数名で、福祉施設で働く山田さん、染色業のため爪の間がペンキで染まっていた天野さん、京都大学の学生で自宅において絵を描くアルバイトをしていた大村さんである。彼らと声を張りあげて、「輝く 陽を 仰ぐ時 ……」(『讃美歌第2篇』161番)と歌った。三栗さん(下宿の御嬢さん)は参加しなかった。洛南教会の青年会には仕事と生活と学問が混在していた。

同志社教会の青年会メンバーとも親しくなった。同志社大学で非常勤講師として哲学を教えていたY先生、博士課程に在籍する少し年上の大学院生、青年会を担っていた学生、それと「イエスの言を聞く集まり」に協力してくれた人である。それぞれに希望を目指す明るさがあった。

*

「イエスの言を聞く集まり」は大きな混乱もなく前半6回の集会を終えた。出席者は30名前後である。準備会では「参加者数よりも内容を大切にしよう」と話しあった。それと3限の授業があるので、「予定通りに集会を終わらせてほしい」という要望が寄せられていた。集会自体も安定してきたので、後半6回は準備会のメンバーと塩野が交互に司会者を担当することにした。次の通りである。

日 時	説教者	司会者
5月29日	寺崎 暹 牧師	渡辺馨子
6月5日	深田未来生 先生	塩野和夫
6月12日	藤代 泰三 先生	越川
6月19日	橋本 滋夫 先生	塩野和夫
6月26日	緒方 純雄 先生	沢村礼子
7月3日	山崎 亨 先生	塩野和夫

ところが、6月5日の集会で会場の空気は一変した。神学部自治会の関係者が前列の席を占めたからである。ヘルメットをかぶっている学生もいた。集会の間、彼らは一言も発言しなかった。それにもかかわらず、自治会関係者の圧力が会場をおおっている。6月12日の集会では説教中の藤代先生に向かって、「アイデンティティの概念とは何か!」と鋭い声で質問が飛ぶ。先生は丁寧に答えておられた。集会後には司会者の越川君を囲んで議論が交わされた。越川君は懸命に答えている。私たちもその中に加わった。自治会関係者からは「礼拝ができない状況にある歴史性」に対する質問があり、主催者は「神学作業に位置づけられた礼拝の必要性」を主張した。

集会での混乱を受けて、6月16日(月)に「イエスの言を聞く集い」主催者の会を塩野の下宿で開いた。学外に集まったのは、5月の検尿検査の結果を仲間が配慮してくれたからである。話しあった結果、2つのことを決める。

- 1 6月12日(木)の出来事は、説教の担当を引き受けて下さっている先生方にはありのままを伝える。
- 2 前期の集会はあと3回なので、学生だけになっても続けたい。

6月12日の出来事を伝えるとすべての先生から「断り」の返事が来た。仕方がないので、先生方の代わりに塩野が説教を担当する。6月19日(木)の集会では「主よ、見えるようになることです」と題して説教した。この日は開始早々ヤジが飛ぶ。参加者からは「怖い!」という声が出た。しかし、「課題を抱えた東九条での神学作業は自力では到底できない。神の恵みに支えられることなくしてできない」と訴えた説教の間は、不思議な静けさが会場に満ちていた。6月26日(木)は「神の沈黙」と題して説教する。集会の後で、神学部自治会委員長と翌日話し合うことにした。

6月26日の集会直後に、検尿検査と診察があった。検査結果は医師も驚くばかりに悪くなっている。彼は「自宅に帰って静養するように」と強く勧めた。その上で、「もし下宿に留まるのであれば、6月から8月は絶対安静にして下さい。経過を見ます。その間は授業に出ることも禁止です」と指示された。診察を終えると真直ぐ下宿へ帰り、布団を敷き横になった。まず考えたのは「自宅に帰るか下宿に留まるか」である。東九条に住んで神学を学び始めたのは、「神の御旨」と信じての選択である。信仰を生きる者として、その時点での「東九条からの撤退」は考えられなかった。そ

こで下宿に留まる事にして、善後策を考えた。まず、医師の指示に従い前期の授業はすべて欠席することにした。香里教会の礼拝と教会学校も欠席である。希望の家でのボランティア活動も事情を説明して、一切休んだ。そんな中で休むわけにいかない2つのことがあった。一つは小西家の家庭教師であり、経済的な事情である。もう一つは「イエスの言を聞く集まり」のあと1回の集会で、こちらは発起人としての責任があった。

*

「塩野、病床に伏す」の情報はたちまち仲間に伝わった。その時を境にぴたっと途絶えたのは懇親を目的にした来訪者である。それに代わってきたのがお見舞いの手紙や葉書である。その数は来訪者の何倍もあった。

今夜の祈祷会であなたのために祈ります。

生きて下さいね。

シオノくん、がんばれ！がんばれ！

おい、早く病気治せよ。

貴兄は神さまばかりでなく、多くの人から祈られています³⁾。

これらの見舞状は温かく、心に染みた。しかし、病床にあつて繰り返し思い浮かんだのは希望の家の一人ひとりの子どもたちである。A君・B君・Cさん・D君……、待ちわびているみんなの顔が浮かんで消えた。その表情から彼らの思いが痛いように思われた。しかし、希望の家に行くことはできない。そんな中で「愛」という概念に対する洞察がひらめいた。

3) 「貴兄は神さまばかりでなく、多くの人から祈られています」は本城勇介氏の手紙に記されていた言葉である。「多くの人から祈られてい」る事実は連日届けられる見舞状で承知していた。しかし、その前に書かれていた「貴兄は神さまばかりでなく」という真実には考え及びもしなかった。そこで、この言葉への黙想から「無言有言の祈り」というアイデアが生まれる。参照、塩野和夫「無言有言の祈り」(『一人の人間に』61-62頁)

そうだったのか。

希望の家の子どもたちに向けて

私を突き動かしていた力、

それが愛だった。

愛の力に押し出されていたから、

この地に住み、子どもたちの課題に向き合うことができたのだ⁴⁾。

そうであるのに、希望の家に赴くこともできない。神が私を東九条へと押し出された事実は疑わない。けれども、病床にあってどこに神の御旨があるのかは分からなかった。

日曜日の午後になると、電気針の治療器を下げて父親が下宿を訪ねて来た。上半身裸になってうつ伏せに寝ると、先ず腎臓のつぼを中心に電気針をあててくれる。それから「背骨の矯正は慢性病には有効な治療法やからな」と言いながら、カイロプラクチックや操体法で体のゆがみを正してくれた。30分くらいで治療を終えると、すぐに帰って行った。週2回の家庭教師が終わると、小西敏子さんが出て来られた。彼女は「お兄ちゃん、身体を大事にしてや。お母さんに心配かけたらあかんで」と声をかけ、大きな紙袋いっぱいの食料品を持たせて下さった。夏に入る前に花模様の日傘をお礼に差し上げた。

6月28日(日)の夜だった。寝ていると、思いがけない来訪者があった。香里教会の池田義晴さんである。

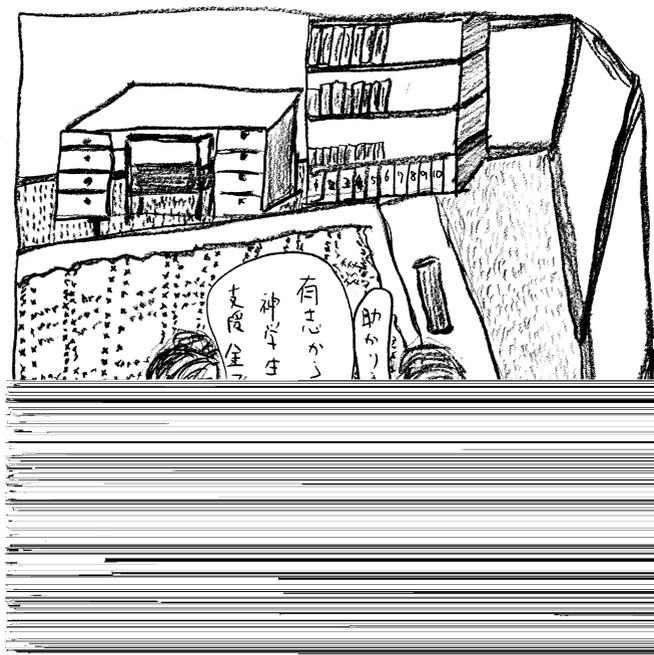
池田 寝ている所を起こして悪かったけど、今日は塩野君に渡すものがあって来た。

塩野 何でしょうか。

池田 春から同志社大学の神学部に行っているの、塩野君を応援しようという人が香里教会にいる。

塩野 ありがとうございます。

4) 病床における愛に関する洞察の結実が、「一途に愛するほどに 愛を失った虚しさは絶望的です。志を生きようとするほどに 志に挫折した者の虚しさは絶望的です」という表現である。参照、塩野和夫「この確かな生を」(『一人の人間に』40-46頁)



'>[V~wRZø â D£

池田 それで神学生への支援を呼びかけたところ、20人ほどの人が応えてくれた。
この封筒には15万円が入っている。1か月5万円、4月・5月・6月の
3か月分で15万円や。これを受けとってほしい。

塩野 助かります。病状が落ち着くまで教会には行けません。皆さんにはくれぐれ
もよろしくお伝え下さい。

*

6月27日(金)の自治会との話し合いは平行線だった。再度、6月30日(月)に協議
の時を持ち、2項目のルールを決めた。

- 1 「イエスの言を聞く集まり」の妨害はしない。
- 2 自治会と主催者の話し合いは別途続ける。

ところが、7月3日(木)の集会はルールを決めていたにもかかわらず、妨害活動により「つぶされた」。私たちは7月3日の出来事と今後の方針について話し合い、結論を出した。

- 1 7月3日の結果を受けて、それがどのような原因によるにしても、神学館3階礼拝堂における集会は中止する。
- 2 前期に行っていた準備会を充実して、参加者各自の「証し」を聞く会として、集会は後期も続ける。

(3)

すべては終わった。希望の家のボランティア活動に参加できず、礼拝の試みも失敗した。今は疲れ切った身体と心を抱えて、一日中布団に伏す日が続く。そこにあるのは固き心だけだった。そんな時にふと思い出したのは、「もっと軽やかで自然な世界を奏でていた」モーツァルトのピアノ協奏曲である。1番から順々に聴いた。19番・20番・21番・22番・23番は繰り返し聴いた。

7月中旬になると、洛南教会の夜の集會に出かけてみた。やはり、讃美歌の練習をしている。久しぶりに声を出して歌ってみた。集會の後で小原安喜子先生に香里教会の神学生支援金について報告する。「それは塩野君にとって良い話だけれども、これをきっかけにして教会が変わっていくとすばらしいと思う。祈っています」と答えて下さった。

病床の日々にも続けていた朝の祈りの時である。7月下旬だった。その日読んだ聖書の一部である詩篇第42篇・43篇に繰り返し句(42篇5節・42篇12節・43篇5節)がある⁵⁾。

わが魂よ、何ゆえうなだれるのか。
何ゆえわたしのうちに思いみだれるのか。
神を待ち望め。
わたしはなおわが助け、
わが神なる主をほめたたえるであろう。

5) この時の感動が修士論文のテーマとなる。参照、塩野和夫「詩篇第42・43篇の研究」(『国際文化論集』第24巻第2号、2010年、147-211頁)

繰り返し句を読んだ時、思いがけないひらめきが走る。

うなだれざるをえない状況に詩人はいる。
そこには神が分からなくなった大きな悲しみもあるだろう。
しかし、詩人は祈っている。
うなだれざるをえない状況にあって、
それでも神に向かって詩人は叫んでいる。
そうだったのか。
御心が分からなくても、
祈ることはできる。
神に向かって叫ぶことはできる。

新鮮な発見だった。この発見により朝の祈りは力を回復する。そして、8月上旬のあの日へと続く。

8月5日(火)の朝である。春以来の出来事を認め、AMさんに誕生カードを書いていた。その時突然、一つの洞察と心身を震わす強い感動がわき上がってきた⁶⁾。思い出されたのはジェフと九州旅行の途中に登った韓国岳の山頂で、私の蹴った小石が底の見えない火口へと落ちていった場面である。洞察とはあの小石に重ねて病床の自分をイメージしたことである。

とっさに足をとめたぼくは足もとから音もたてずに小石が
不気味な暗闇へ落ちこんでいくのを見た。
ぞっと全身を寒気が走った。
その時、ぼくはまっさかさまに落ち込んでいった小石のように
山頂を大きくけずりとった暗闇にのみこまれていた。

しかし、小石を覆う暗闇から自分の内面に目を向けると、そこには生命の生み出す新鮮な感動が湧きあがっていた。

6) 参照、塩野和夫「この確かな生を」(『一人の人間に』40-46頁)



´£Ñq ·w•Öpø å D£

ああ、ぼくは生きている。

ぼくは生きている。

なんとすばらしいことだろう。

なんと喜ばしいことだろう。

どれほど虚無にのみこまれようと

生きているではないか。

どんなに絶望に圧倒されようと

生きているではないか。

底知れぬ暗闇に落ちこんでいった者を

死からよみがえられた主が

あの主が支えていて下さるではないか。

湧きあがってきた感動が指し示していたアドバイスは明快だった。与えられている「確かな生」を大切に守り、生きることである。志を立てて東九条に来た私は、生きるため自宅へ帰ることにした。

*

8月中旬に実家へ帰ると、母屋の奥の部屋にベッドが用意されていた。そこであれば両親は仕事の合間に様子を見ることができる。朝から夜までこのベッドで休み、夕食を終えると二段ベッドのある兄弟用の小屋に戻った。自宅は一日中活気に満ちていた。朝から次々とやって来る患者さんと父は話している。やがて、治療室から「エイッ！エイッ！」と掛け声が聞こえてきた。わずかな時間でもあると部屋をのぞき、「治療をしとこか」と言っただけで、すばやく背骨の矯正をしてくれた。母は午前中に掃除洗濯と買い物、それに患者さんの相手をしていた。昼食を終えると夕食の準備である。2時半には生徒のために教室を空けておかなければならない。3時になると教室が始まり、「願ひましては……」と指導する母の掛け声とパチパチとそろばんを弾く音が聞こえてくる。仕事と生活の活気に包まれながら、ひたすらに休んでいた。8月下旬の検査結果で改善が認められたので、朝夕には散歩を始め後期の通学に備えた。

9月に入ったばかりの日曜日午後だった。ギターを抱えた瀬野勇君が京都から見舞いに駆けつけてくれた⁷⁾。病状について話しあった後に、ギターの伴奏に合わせて「海はいいな」を歌ってくれた。彼が東海大学海洋学部在学中に作った曲である。次に「夏になったら」を歌い、3曲目に入る前に「これは塩野君のために作った曲です」と紹介し、「我友に」の歌詞を説明してくれた。それによると、「1節と2節は元気で活躍していた当時を、3節は病の床にある塩野君への祈りを歌っている」。そして、スローテンポで歌ってくれた。

我友に

風を切って 飛んでゆけ
地の果てまで 飛んでゆけば
大空へ 大空へ 舞い上がる
叫べよ 友よ 我友よ

波を切って 雄々しく生きよ
海の果てまで 生命の限り
海原を 海原を かけめぐる
求めよ 友よ 我友よ

7) 参照、塩野和夫「ありがたきは友」（『一人の人間に』62-64頁）



I ú w S _ ā M c ā D E

夢を超えて 夢に生きれば
生命は尽きて 愛も消える
陽の国へ 陽の国へ 燃え上がる
光よ 光れ 我友に

9月中旬になって、KM君を誘って香里教会へ行く。礼拝に出席し、よるだん会にも参加した。ただ健康と体力に自信がなかったので、教会学校は挨拶だけにした。みんなとても喜んで声を掛けてくれる。KMはどこへ行くにも付いて来た。3か月休んでいる間に、急展開していた事業があった。特別養護老人ホーム 寝屋川十字の園の建設である。山田律子さんのおじいさんが「老人福祉のための使用」を条件に、香里教会に土地を寄付された。慎重な検討の結果、教会は母体となる法人栄光会（代表理事 富田さん）を設立し、特別養護老人ホームを建設することになった。中西典彦先生は理事の一人として「社会における証しとして寝屋川十字の園の事業に取り組みまな

ければならない」と言って、寄付に走り回っておられた。内本栄一さんは経営していた会社を止めて、大学に入学し直して2年間社会福祉を学ばれた。

*

10月に入ると、大学の授業に戻った。ただし、検尿検査の結果に左右される出席である。演習科目では発表を課せられた。2週間ほどかけて準備し発表を終えると、結果が悪化した。すると1週間の安静である。ある時、橋本滋夫先生から「腎臓の悪い者はあんぱんを食って寝ておけ！」と注意された。「何のことか？」と思って調べてみると、あずきは腎臓に良い食材だった。

証しの会も10月から毎週水曜日に宗教センターで再開した。10名前後の参加者がある。新たな参加者の一人に本行健三さんがおられた。北海道でレストランを経営していた本行さんは40歳代になって店を閉じ、同志社大学神学部に入学される。京都では奥様と二人で丸太町教会の管理人をしておられた。11月19日にマタイ福音書6章22-23節をテキストにして話して下さった。「聖書がイエスの身体的特徴を記していないのかなぜか」という導入から、「信仰において大切なのはイエス像のイメージである」とされた。その上で、大原美術館や民芸館の作品を紹介し、「本物を見ることによって偽物を見破ることができる」と結ばれた。一度だけ、丸太町教会を訪ねたことがある。歓迎して下さり、夕食までご馳走になった。具だくさんのシチューで、どんぶり茶碗によそわれていた。おいしくいただき、体が温まった。

(4)

1976（昭和51）年4月に神学部4年生へ進んだ。定期的に受診していた検尿検査も無理さえしなければ安定してきたので、意欲的な研究活動を再開する⁸⁾。

神学部の専門科目ではこの年度も聖書神学とりわけ旧約聖書神学の科目を多く受講した。山崎先生のヨブ記と和田先生のエゼキエル書、それに野本真也先生のモーセ5書概論である。演習では野本先生の創世記の研究をとった。野本先生の演習はヘブル語文法もそうであったが、すべて手製のテキストを用いられた。創世記の研究では毎

8) この年度は数冊しか記録がない。以下の通りである。

福井達雨『僕アホやない、人間や』 福井達雨『アホかて生きているんや』 J.D. デイヴィス『新島襄の生涯』アーネスト・ゴードン『死の谷をすぎてークワイ河収容所ー』

回創世記のヘブル語原典の数節とそれに関する研究を細かく記したプリントが配られ、議論を展開された。細部にまで研究が及ぶ点では和田先生と似ている。しかし、両者から受ける印象は対照的で和田先生がどっしりと安定しているのに対して、野本先生は鋭く繊細に思われた。新約聖書神学では、橋本滋男先生の演習科目である聖書本文批評を履修した。キリスト教史では土肥昭夫先生の日本キリスト教史をとる。一見単調に見える土肥先生の講義には随所に学生に向けた問いかけが仕込まれてあり、聴く者の関心を刺激した。組織神学では土居先生のバルト神学と竹中正夫先生のキリスト教倫理、それに演習で土居先生のティリッヒを学ぶ。「世界の竹中」と呼ばれていた竹中先生は世界におけるキリスト教会の動向を紹介しながら、地味で丁寧な講義をされた。キリスト教教化学では深田先生の礼拝学と樋口和彦先生のユング心理学を受講した。臨床心理学の実験を紹介しながら、樋口先生は人間の心の秘密を説き明かされた。現職の牧師だった岡山孝太郎先生はドイツ留学や御自身の大学時代における体験談を交えながらドイツ語文献でティリッヒを教え、ドイツ語講読を担当された。

証しの会は準備会で調整しながら、水曜日の昼休みに宗教センター1階の集会室で集まりを続けた。76年度の担当者は次の通りである。

まとめ役	塩野和夫
交渉役	山見正徳
大蔵省	渡辺馨子
連絡役	塩野和夫 神学生
	福井 明 同志社教会関係者
	金沢宏彰 香里教会関係者
	松隈隆子 神学部教員
	沢村礼子 その他

松隈隆子さんは4月から神学部3年生に編入学されていた。長崎市の出身で山見さんの婚約者だった。エネルギーギッシュな彼女はたちまち証しの会の推進者となる。たとえば、彼女の生活する一粒寮を会場にしてしばしば準備会が開かれた。証しの会は10名前後の参加者で集会を続けた。前期の証言者は次の通りである。

- 4月28日 山見正徳 Iコリント13章1節～14章1節 「愛について」
5月12日 渡辺馨子 マタイ21章28～32節 「真剣に神の言を受け止める」
5月19日 塩野和夫 マタイ6章9～13節 「キリストの故に苦しむ人」
5月26日 沢村礼子 ルカ10章38～42節 「求められていることはただ」
6月2日 本行健三 IIコリント12章7～10節 「立ち帰る所－弱い時にこそ強い」
6月9日 松隈隆子 マタイ17章14～21節 「からし種一粒の信仰」
6月16日 福井 明 ヨハネ11章43～44節 「主に答えつつ歩む生を」
6月23日 こだまする 讚美の歌声（証しの会は休会）
6月30日 大島純男 ヨハネ14章18節 「召命を受けてより」
7月7日 宮本その子 ヨハネI 4章1節 「矛盾に開かれながらも」

*

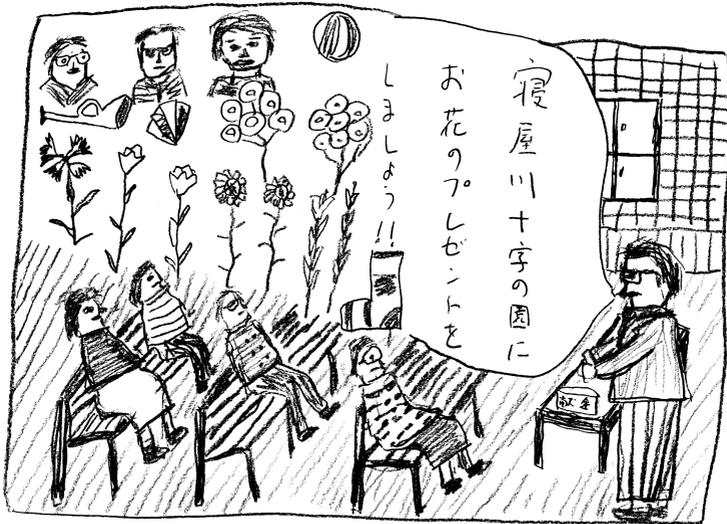
寝屋川十字の園の建設工事は1976年春には急ピッチで進んでいた。その頃から有志による「寝屋川十字の園にお花のプレゼントをしよう」という呼びかけが起こる。リードしたのは30歳代の男性会員 SAさんだった。礼拝後、彼はお花を植える趣旨を説明した。

寝屋川十字の園の建設工事が急ピッチで進んでいます。しかし、新築の建物はそれだけでは殺伐としていて落ちつかないものです。そこで、花壇を作りお花を植えてはどうでしょうか。

彼らは教会で寄付を募り、昼からは現場へ出かけた。ご老人の入居が始まる夏までに花で憩いのある十字の園にしようと作業に取り組んでいた。

香里教会における私の立場に4月から変化があった。「塩野神学生」と呼ばれるようになったのである。2月に内本栄一さんから役員会の内情を知らされていた。76年度の予算を協議する会議で、同志社大学神学部にも学ぶ塩野の扱いが話し合われた。内本さんによると、概要は次の通りである。

「同志社大学神学部で学んでいる塩野さんを香里教会でも神学生として扱ってはどうか」という提案があった。併せて、「現在有志で行っている支援を教会がすべ



ø0'GÈw tSVwÓè,ïÄ)O

ã_Žñ

きではないか」という意見も出た。ところが、これに対して主要役員の1人が強く反対した。その後も賛成と反対それぞれの立場から発言があり、議論はいきづまった。そこで私たちが妥協案を出して、何とかそれで収めた。そういう事情で4月から金額は減るが教会から神学生への支援金を出す。塩野君には今回の役員会の事情を承知しておいてほしい。よろしく頼む。

塩野神学生に活躍の場が与えられたのは夏である。7月25日と26日に関西セミナーハウス（京都市）で開催された香里教会の夏期修養会では発題を担当し、「御国が来ますように」（マタイ福音書6章10節）をテキストに「志に立つ」と題して講演を試みた。8月8日～10日に同志社唐崎ハウスで開かれた同志社教会ジュニアチャーチキャンプにも招かれて、主題講演「弱い時にこそ、わたしは強い!」（Iコリント12章9～10節）を行う。直後に由良キャンプ場で開かれた香里教会の青年科キャンプでは「木には望みがある」（ヨブ記I4章7～10節）と題し、主題講演を担当した。8月29日～30日に行われた香里教会青年会（よるだん会も合同）では主題講演「花瓶を磨いていて気づいたこと」（Iヨハネ4章11～12節）を語りかける。



©KI™ q±, %ZoXi^M/O^-ø0'GÈw w©ï å å

1977 (昭和52) 年1月上旬には餅つきを行った。中庭に道具を準備し始めると、みなさんが懐かしそうに窓から眺めておられる。いよいよ餅をつき始めると、車椅子で庭まで出て来られる人もいた。窓の周辺はたいへんな人ばかりである。十字の園が盛り上がった一日だった。

香里教会では新年に地区別家庭集会を行っていた。77年1月5日には枚方市駅方面の集会を担当し、「新年の夢」(創世記37章2b~11節)と題して講話した。枚方市駅周辺は香里教会設立当時に香里園と並んで集会を行っていた。その頃は関西学院大学神学部出身の赤木武次さんが中心になって、将来の伝道所開設を願いながら集会を続けておられた。1月12日には香里教会の周辺地区で家庭集会を担当し、「父よ」(マタイ福音書6章9-13節)というテーマで話をした。集会には同志社の関係者が何人かおられたので、話は盛り上がった。

同志社大学における証しの会は後期も9月27日から毎週行った。10名前後の参加者がある。婚約していた山見正徳氏と松隈隆子さんが夏に結婚されたので、証しの会では10月15日(金)に結婚記念ハイキングを行う。清滝から嵐山まで歩き、嵐山にある旅館下の河原でシチューを作って食べる。二人にはお祝いとしてサトーハチローの額を贈った。会費500円、記念品代500円だった。11月28日~29日には北小松学舎で修養

会を行い、松隈正徳さんと塩野が講演を試みた。

1977年2月に渡辺孝治さんに招かれて下宿を訪ねた。三条榊屋町にある町屋の2階だった。話が一段落すると、渡辺さんがおもむろに取り出されたのは和綴じの『永平寺元禅清規』2冊本である。

永平寺の掃除の仕方を書いた本です。これを塩野君の卒業記念として進呈します。書齋の片隅にでもおいて下さい。こういう偉い本を置いておくと、そこから良い香りが放たれて部屋全体を清めます。

御好意を感謝して受け取る。渡辺さんからは在学中も『澤木興道全集』全18巻を推薦いただいて購入し、全巻を読んでいた。

3月になると、神学部事務室から呼び出された。何ごとかと思って訪ねると、「塩野さんに30万円の奨学金が出ます。卒業する神学生の主席に出される奨学金です」という説明だった。記念なので、奨学金でアウグスチヌス著作集（教文館）を購入する。卒業式は3月20日に栄光館で挙行された。神学部卒業生代表が塩野和夫、修士学位受領者代表は渡辺孝治だった。